

はじめに

この本は、「都構想」を止めて、大阪を豊かにするための諸政策や取り組みに関して、現場第一線で活躍する方々との対話をとりまとめたものです。

この内容を絵に描いた餅に終わらせず、ご理解・ご賛同いただける方と一緒に、豊かな社会を実現していきたいと考えています。

私がどのような経緯と考えでここにいるのかを知っていただきたく、次ページ以降に、2018年の拙ブログの記事を少しアレンジして掲載します。

2020年1月

元大阪府職員 大石あきこ



あの日―橋下知事に抗議した大阪府女性職員



これ、12年前の私です。

あの日、2008年3月13日。橋下知事就任時の最初の朝礼で、サービス残業に抗議した女性職員として、新聞やテレビで話題になりました。そのことを振り返ります。

私はそれ以前、橋下徹さんがテレビに弁護士として出演し、活躍していたときから、好きではありません

でした。ご本人も自分のことを「スネ夫」といていたように、「下」を容赦なく叩くところが、すごく鼻についでいました。こんな人が行政の長になったら、いじめ社会が加速するんじゃないかと思っていたので、橋下さんの知事就任が決まったときは、危機感をもちました。

その当時（2007～2008年頃）、世間で問題になっていたのは、非正規雇用の増加による所得格差。篠原涼子さん主演の「ハケンの品格」というドラマがヒットしていました。IKKOさんの「どんだけ～」が流行語大賞に選ばれたのが、2007年。なつかしいですね。

2008年というのは、使用者に都合の良い雇用のルールが次々と敷かれ出した頃。労働組合はどんどん衰退。そのしわ寄せとして、女性は能力があっても、正社員にはなかなかつけない状況でした。

篠原さん主演のドラマも、銀行をリストラされた超有能な女性が派遣社員として、男性社員や正社員とバトルしていくといった物語でした。篠原さん演じるヒロインは当時30歳過ぎ、いま40歳過ぎたくらいの世代。私も同世代です。

俗に「就職氷河期世代」といわれる世代で、就職活動の頃に景気のどん底で、やや景気が回復したといわれたときにはもう40歳になっていました。今なお正社員になれない人も多く、「失われた世代（ロストジェネレーション）」として大きな損失をこうむっています。

橋下さんは2008年の知事選に、自民・公明の推薦で出馬しました。あたかも格差やリストラに苦しんでいる民間の労働者の味方のふりをし、公務員を敵対視してひたすら叩き、「公務員の特権を奪えば格差はなくなる」とばかりに宣伝したのです。労働組合への嫌悪もすごかったですし、言っていることもデタラメばかりでした。

真実かどうかは重要ではない。

ある目的への意志を感じました。

どうしてあんなに平気でウソを言えるのだろう、信用できない人だ、と思いました。橋下さんは、すでに年収何億円で発言力もある「上」側の人、エスタブリッシュメントじゃないですか。なのに、デマまで言って、「下」側の味方ヅラをして、人の目から問題の本質をそらし、貧困を助長させて……。

そんな橋下さんを持ち上げ続けるマスコミ。

2008年2月、橋下徹大阪府知事が誕生。そして、あの日3月13日、就

任後の最初の朝礼があって、朝礼抗議騒動が起きたのでした。

橋下知事は、最初の朝礼で「30歳以下の若手職員」を集めました。事前に「上司への不満があったら僕に直接メールして」というメールを全職員に送っていました。

私はちょうど30歳で、朝礼の対象でした。

私は大気汚染や廃棄物の規制をする部署にいて、その日はすでに、PCB廃棄物の立ち入り検査のために工場を回るという日程を組んでいました。なので、上司に「朝礼は欠席」と伝えてあったんです。でも上司からは「立ち入り検査を遅らせてでも、朝礼に出席せよ」と言い渡されました。

だったら、ちょっとは意見せなアカンなと心の中で思いつつ、「承知しました」と返事。そうして、朝礼に臨みました。

朝礼会場では、マスコミ各社がテレビカメラを並べてずらりと勢ぞろい。さては大阪にあるカメラ全部ここに集めたやろ！？と思うほどです(笑)。

この頃の橋下さんの発言は、「公務員は特権階級」「公務員というシロアリ」「公務員のケツを蹴る」とか憎悪をあおるもので、マスコミもそれを面白おかしく連日テレビで流していました。そのマスコミの前で「シロアリ」の公務員が意見を言うとか、アウェー感パネーです。

あー、しかも作業服かぁ……これは要らん女心(笑)。

バッシングを覚悟せざるを得ない。でも、意見を言うべきときには言

わなければ、と着席。

朝礼が始まり、橋下徹知事登場。

生で見るの初めてだなー。近視気味なのであまり見えない……。

で、橋下知事の第一声は「府庁を変えるのは知事でも幹部でもなく、第一線の職員である皆様方」

あれ、方向性変えてきた？

しかし、それは一言目だけ。二言目から、さっそく橋下節サクレッツ。

「本当は始業前に朝礼をしたかったが、超過勤務になると言われてできなかった」

「民間では始業前に準備や朝礼をするのが普通。そんなこと言うのなら、勤務時間中のたばこや私語も一切認めない、給料カット！」と声を荒げました。

はあーっ！？

いま民間の労働者がサービス残業(=違法)でどんだけ苦しんでると思ってるんだ！？ 府庁だってサービス残業が横行してるっっちゃうのに、そんなことも知らんのか！！

だいたい、「そんなこと言うのなら」もなにも、ここにいてるみんな、まだ何も言ってないだろうが！(私の心の中)

ここで、橋下知事が「意見があるなら、言って！」

あーそんなら言ってやろーじゃねーか！(まだ私の心の中)

大石、起立。

大石「ちょっと待ってくださいよ！」（マイクないので地声で絶叫）

橋下知事「……！？」

大石「どんだけサービス残業やってると思ってるんですか！？」

（「どんだけ～」は2007年流行語大賞）

それに対して、橋下知事は「サービス残業、してくれているのはありがたい」と。これは違法なサービス残業を「ありがたい」と肯定するもので、問題発言ではありませんね。

ただ、橋下さんの性分からすると、いきなり楯突いてきたクソ生意気なヒラ職員に対して、心の中では「ひねりつぶしたろか！」くらいは、きつと思ったであろうに。そうは言わず、とっさに「サービス残業」発言を肯定（違法だけど）してくるのは、今思うと大人の対応でしたね。

私は言いたいことがあったので、発言を続けました。

「今の府庁に問題はありますよ。でも、それは職場で職員が信頼関係を作って、上も下もなく、府民のための仕事を本気で議論することでは解決しない」

「あなたは若い職員に、『上司に不満があれば自分にメールを送って』などときれいなことを言ったが、職場をバラバラにしている」

「職員と府民を分断している」

「あなたのやろうとしていることは逆ばかり」

凍りつく周囲。

橋下知事は「ありがたい意見。どんどん言ってほしい」とまとめました。でも、終わってから廊下を歩く橋下知事の表情は鬼のように険し

かったと、すれ違った職員に聞きました。

私は、予定していた立ち入り検査を遅らせて朝礼に出席していたので、同行する先輩職員を外のクルマで待たせていました。で、「早よ行かなアカン」と退室したその瞬間。マスコミのカメラ軍団が群がってきて、質問の嵐となったのです。橋下知事への私の意見の大半は「職員と府民を分断しないで」という内容だったんですが、マスコミの関心はそこになくてサービス残業の部分に集中しました。

府庁ではサービス残業が蔓延していました。私もしたことはあったのですが、そういう風潮にあらがうためにも、私個人としてはできるだけ残業は「サービス」にせずに付ける、後輩にも付けさせるということを意識的にやっていました。なので、「（サービス残業を）私はしてません」とテンション低めに答えました。

私個人がどうかは本質ではないのに、それをしつこく聞いてくる意図が嫌だったから。そしたら後々、そのセリフを取り上げて「サービス残業なんかしてないのに、ウソをついたから、後ろめたそうに言ってる」みたいにインターネットで叩かれました。

まあでも当時は、公務員バッシングが一番吹き荒れていた頃で、「公務員はラク」「さぼって甘えて税金食いつぶしてるシロアリ」と大半の人が偏見を持っているときだったので、公務員が「サービス残業」などするはずがないという認識ですよ。その証拠に、ほーら、大石もサービス残業やってないじゃないか！的な。

実際、3月17日の府議会で、当時、府議会議員だった松井一郎さん（現・大阪市長！）が、この件で「大阪府にサービス残業はない」との府当局回答を引き出し、あの職員の言うことは間違っていたとアピールされました。

「サービス残業やらせてます」なんて使用者が言うわけないだろ。だから根深い問題なんじゃないか。

その一方で、サービス残業やってなきや一人前じゃないみたいな根性焼き（古い？）の風潮。おかしくないですか。それでみんな追いつめられている。マウンとの取り合いで心もギスギスする。

橋下知事はその状況に、すごく加担した人だと思っています。

「身を切る改革」なんていって、やったのは緊縮財政と、とんでもないコストカット。でも、その実は公務員ではなく、普通の生活者・労働者の身を切って疲弊させてきた。そうして10年経った今、高度プロフェッショナル制度が強行採決され、また、ロスジェネレーションの状況も固定化しています。

朝礼が終わったあとの話に戻ります。

なんとか報道陣の輪から逃れて、立ち入り検査に向かうクルマの中で「かなりカメラに撮られたから、夕方のニュースにちらっと出るかもしれませんわ～」なんて軽口叩いていました。

が、ちょうどその頃、マスクミ各社の朝の全国ニュースで、テポドン発射の速報並みに「橋下知事の初の朝礼で女性職員が抗議」の一報が流され、私の作業服姿が全国のお茶の間に映し出されていたのでした。

午前中の検査を終えて、お昼ごはんのお店を探しに商店街をうろうろして、定食を食べて……。なんか、今日は見られてる気がするのだ詰まるなあ……。

職場に戻ったら、ざわつきの余韻がフロアに残っていて、聞けば、朝礼のあと「大石あきこ探し」に、マスクミが押し寄せていたとのこと。立ち入り出張があって良かったかも。

その3日後、反戦集会があって、私も呼ばれたので、朝礼の出来事をスピーチしました。その集会のスピーチの原稿が手元に残っているので、以下に掲載します。

この発言、「過激」ですか？

3月13日に、橋下大阪府知事の朝礼で、立ち上がって抗議したと報道された大石あきこです。あまりに騒動になってしまい、今日、集会で発言しようかどうか直前まで迷っていました。でも、世界の労働者が団結して戦争を止めようというのは当たり前のことだし、私が抗議したのも、職場や組合の仲間、そして、ここにいる人、世界の闘う労働者に後押しされたからだと思います。

発言をやめるのは自分にウソをつくことになるので、発言することを決めました。

このことで、本当に多くの方々から激励をもらいました。私みたいな小さな一人の労働者に、予想できなかったとても大きな反響があり、正

直、穴があったら入りたい気持ちもありますが、全国の方々の期待を受けてこれからがスタートだと考えて、もっとがんばろうと思っています。

私はなぜあんなことを言ったかを説明します。

あの朝礼の日、知事はわざわざテレビに向けて「職員の仕事が悪い、甘い」とレッテルを貼り、「こんなことを府民に知られたら、やっぱり信用失いますよ」と言ってきました。わざと府民の不信の種をまいて、知事の自分だけが府民の味方だとテレビに向かって演出しているんだと思いました。

そのあと、知事はまくしたてるように「始業前の朝礼が超過勤務になるというならタバコや私語の時間は給料を引く」など言い出した。そもそも「超過勤務になる」といったのは知事本人が統括する人事当局で、朝礼に集まった職員はそんなやり取りは全然知らない。なのに「職員がそんなこと言うならこうするぞ」なんて自作自演だと怒りがわきました。

そして、「職員が甘い」と連発してくることに、人生を削って働いている府庁の職員の顔がたくさん思い浮かんで、彼らへの侮辱は絶対許せないと思いました。

それから、「民間では超過勤務、当たり前。賃金やボーナスカット、当たり前」とそれを模範のように言う知事は、民間労働者がどんなに苦しい思いで超過勤務を強いられているのか知らない、民間労働者の流す汗や涙のことを知らないんだと思いました。

経営者の都合で、賃金を大幅にカットされたり、解雇されて生活できない府民、労働者の現状こそをなんとかしたいと私は思っているのに、この知事は「それが当たり前だから職員もそうすべきだ」と。労働者全体を切り捨てる人なんだと思いました。

職員がここで闘わないと、府民の生活も、職員の生活もむちゃくちゃになる。それで私は立ち上がって、発言しました。

あのあと、職場の人をはじめ府庁全体、他の自治体職員、民間の労働者からの激励が、数えられないほど寄せられました。私は一人じゃないと感じています。

私は府庁で働き始めた頃、自分が労働者だという自覚がありませんでした。行政の職員として仕事をちゃんとやれば、社会は良くなると思っていました。でも、働き続けるなかでサービス残業の実態を見てきたし、働く者は職業や場所や国を問わず、搾取されることを自分の実感として知るようになりました。資本主義とはどういう社会なのかを考えるようになりました。

世界ではイラク戦争が起こり、国内では年間3万人が自殺し（当時）、約半数の労働者が非正規雇用、パート、派遣労働者になっている。生活者の命を守るために働いている公務員・自治体労働者が、その現状を支えるかのように淡々と仕事を進めるだけの存在であっていいのか。本当は、そんな存在じゃないはずだと思うようになりました。

橋下知事は、「自治体経営に革命を起こす」と言っています。その革

命は、府民・労働者の社会保障も賃金もすべて奪う血みどろの革命だと思ひます。私は自治体労働者の使命として、そんな間違つた革命には、労働者による労働者が生きるための革命を対置すべきだと思ひます。

自治体労働者は、公務員バッシングの嵐が過ぎるまで腰をかかめるといふのではなくて、すべての労働者とのあくなき団結を求めて立ち上がるこゝろが、求められていると思ひます。その団結のなかに、戦争を止める力も、差別を乗り越える力もあります。

職場や社会を変えるのは、橋下知事ではなく、私たち労働者です。

こゝろで、この集会で、ちょっと変わった体験をしました。集会当日、わりと保守で知られる『週刊新潮』の記者さんが、まぎれこんでいたんです。若くてすごく綺麗な女性でした。

私は最初、記者とは知らず、てっきり一般参加者だと思つて「わー、こんな若い女性が反戦集会に来てくれたんだ」と話しかけに行きました。

「集会来てくれたんですね」

「こういう集会は、初参加ですか？」

とか、むちゃなれなれしく話しかけて。

そしたらその女性が、もうダメだ！(><)みたいな顔をして、

「私、実は『週刊新潮』の記者で、あなたのバッシング記事を書くために来たんです」と白状されました。

「ええ?? そうなんですか？」

「そうなんです。でもこんな風に話しかけてくれて、ウソをつくのは耐えられないので、私、帰ります」

「そうですか……まあ、言ってくれてありがとうございます」

そんな感じだったんです。

でも数日後、地下鉄に乗って中づり広告に目をやると衝撃の文字が！

「橋下知事」にくってかかった「ジャンヌ・ダルク」美女職員。

「美女職員」ですってよ！ 聞きました？ 奥さん。

びっくりするわ。

電車降りて、とりあえず、すぐに新潮購入(笑)。

記事の内容は『週刊新潮』にしてはすごくお手柔らかな、イヤミ程度で済んでいる。顔写真も他社と比べて写りの良いのを採用してくれたみたいでした(他社のは人相悪すぎ!)

勝手な憶測なのですが、その女性記者はバッシング目的の取材を命じられたものの、同じ女性だから、私を突き落とすようなことはしたくなかつたんじゃないかな。日本では女性が何かを主張するとすぐにバッシングされますよね。それに加担したくなかつたのでは。

ただ一点、残念だったことは、私のスピーチの「自治体労働者」を聞き間違えて、「肉体労働者」と記事にしてしまつてたことです(笑)。

結局、その後1か月くらい、ネットを中心にバッシングが続きました。府庁に寄せられた抗議電話は千件くらい。2ちゃんねるではピーク

のとき一晩で20スレッド立ったほどです。なかには「今から刺しに行くために深夜バスに乗る」といった殺人予告まで。犯罪ですよ。

あと、年配の男性がいきなり窓口に「革命戦士のいる部署はここか!」と怒鳴り込んできたこともありました。新規採用の女性職員が「そんな部署はございません!」とか一生懸命応じてくれて。ごめんよ……。

「大石あきこは絶対にサボりだから、これから毎朝、遅刻しないか見に来てやるからな!」とか言い出して。うっわ、絶対早起きしよ!と焦りましたが、その年配男性、2日くらい来てあきらめましたね。

でも、良いこともありましたよ。

大きなバッシングを受けるときというのは、それだけ励ましてくれる人もたくさん現れるものです。職場でそれまで「大石の組合活動は目立ちすぎている。出世できなくっても知らんぞ」なんて言っていた管理職の一人が、騒動直後、「朝礼であなたが言った“職員と府民を分断している”というフレーズは、このすさんだ社会の中で、久々に心が洗われる一服の清涼剤だった」なんてメールをよこしてくれました。

バッシングの電話をたくさん受けてくれていた先輩に、迷惑をかけていることを謝ったら「大石さんは悪くないんだから、今はとにかく心が休まるようにしてね」と言ってくれました。

工場の立ち入り検査を一緒に回るなどしていた市役所の人たちに「大石さんの勇気ある行動に敬意を表します」とグループ一同で言われたり。

夫は私の代わりに夜な夜な2ちゃんねるをチェックして、ムカついてくれたり(笑)。

その頃、私は一人ではなかったのです。思い出しても胸が熱くなります。

だからみなさんも、この社会でバッシングに苦しんでいる人を見かけても、まずは絶望しないでください。きっと誰かがその人を励ましています。みなさんも機会のあるときに、そんなふうに励ましていただければ、必ずその人の生きる力になるでしょう。

長々と書きました。

こんな経歴をもっているのが、私です。

その後10年間、私なりに真面目に府庁で働き続けました。労働運動も、市民運動もささやかながら、できることをやってきました。そして、2018年10月に退職。大阪の状況を変えるため、翌2019年4月に、淀川区から府議会議員に挑戦しました。

落選しましたが、たくさんの応援・支持をいただきました。

だから、ここからがスタート。

この十年余り、大阪では維新府政と維新市政。国政では民主党政権、安倍政権。緊縮財政の結果、生活が苦しい人はいまだ5割を超えるのに、その苦しい人をますます搾り取り、大金持ちがますます肥えるというルールばかりが決められていきます。

大阪でいうと、たくさんの依存症を生み出して、外資だけが儲かると

いわれているカジノ。そこに数百、数千億円の税金が投入されようとしています。どれほどの世帯が破産して泣くことになる？ 子どもや家族が泣くことになる？ そのお金全部を介護など人手不足でたいへんなところのお給料大幅アップや設備投資につぎ込んだら、どれだけ大阪は豊かになるか。

でも、そうはならない。

それは、長きにわたり、政治家の多くが大金持ちに飼いならされているからです。逆に、働く人々のための政治家が増えたら、多くの人々にもっとお金が回っていき、生活は豊かになります。

私は、そういう政治をめざしたいと思っています。

続きはご購入ください